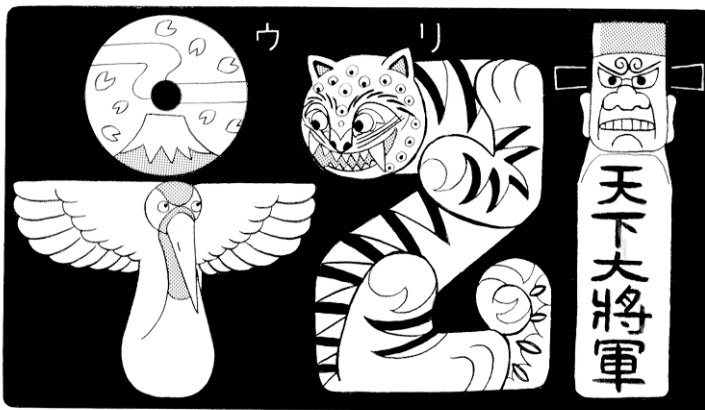




日韓合同授業研究会会報

第 110 号

2017 年 9 月 10 日発行

2018 年北海道苫小牧交流会に向けて

ー下見報告ー

安藤

8 月 22 日火曜日北海道は朝から天気が悪く、結構雨が降っている。午後 2 時すぎ、新千歳空港に斎藤、藤田、佐藤、吉川、川辺、二村、安藤の日韓合同授業研究会のメンバーが集結した。来年度交流会下見のためである。ここからレンタカーを借り、高速道路を経由して 1 時間足らずで、苫小牧市の「苫小牧アルテン」に到着した。ここは緑豊かで広大な敷地に、バンガロー、ロフトハウス（キャビン）、キャンプ場といった宿泊施設に加え、パターゴルフや乗馬、温泉も楽しめるアウトドア型リゾートであり、会議室も充実している。来年度の交流会会場に予定している場所である。

ここに到着した我々は、すでに到着されていた、苫小牧駒澤大学の石先生、生徒で韓国からの留学生朴さん、同じくベトナムからの留学生ハイさん、地元苫小牧市にお住まいで石さんの大学の社会人学生桐生さんと面会した。石先生は明日の FW 案内および来年の交流会にご協力いただく方である。石先生は『アルテン』は日本だけでなく、世界的に見ても屈指のアウトドア宿泊施設です」とおっしゃっていたが、本当に素晴らしいロケーションである。（韓国の人々にも喜ばれるのではないと思う。）そして翌日石先生のご尽力もあり来年度のこの場所の確保ができそうだ。感謝多大である。

この夜は、さっそく温泉を堪能し、併設の食堂で夕食をとり女性陣のキャビンにて明日の予習やら、なんやら始まった。ただ私は運転した疲れもあってか、別棟バンガローに早々と退散した。（あまり記憶がないので、少々間違っているかもしれません。）

翌 23 日水曜日は昨日とうってかわって良い天気である。絶好の FW 日和である。最近はず 4 時には起きてしまう私は、やっぱり早く起きてしまったので、こんな素晴らしい環境を堪能しない手はないと思い、散歩した。この施設に隣接して「錦大沼」という池があり、その周りを巡る遊歩道を歩いた。池の周りは原始の森、朝のすがすがしい空気とともに北海道の醍醐味を満喫できた。今もいいけど、「錦」の名の通り紅葉シーズンは素晴らしいのでは

目次

2018 年北海道苫小牧交流会に向けて・1	元暁展が開かれる・・・・・・・・・・	5
継承日本語教育における漢字指導の実践例・・・・・・・・・・		6
洪城交流会アンケート集計(抄)・・		10



ないかと思った。(下見に来て良かった。)

朝食は各人前日に用意したものをいただき、いよいよ9時出発、石先生運転のホンダの軽ワゴンと私が運転するワンボックスカーの2台分乗だ。

(私が運転するのは10年以上前の型のエスティマだ、しかも傷がある中古車だ。) エスティマを運転してみて、妙にブレーキが甘く、車が傾いているような気さえした。道路も雪国のせいかな、少したわんでいるからかも、などと助手席の斎藤さんと話していた。この時はまだあのアキシデントをだれも予測していなかった。同宿した桐生さんをご自宅に、アルテンまで運転してきた車をおくというので住宅地に入ってしまった。北海道というか、この辺の家は周囲に塀やフェンス、垣根といった境界のないのが結構多い。まるでアメリカの住宅地みたいだななどと一人感心した。

その後2台は、コンビニに立ち寄り一路FWへ、「道央道」「日高道」と高速道路を乗り継ぎ、むかわ町に入った。

地図があればわかりやすいのだが、このあたりまでが胆振(いぶり)地域、その先平取町からが日高地域である。さらにこれも地図があるとわかりやすいのだが、苫小牧から日高の様似までの間をはしるJR日高本線のうち、鷗川(むかわ)・様似116kmが一昨年1月の高波被害で不通のままである。このまま廃線になるのではないかともしさやかれている。むかわ町で渡った踏切の線路が錆びついていたので、北海道の厳しい現実をうかがわせる。そして最初のFW地は、この日高本線鷗川駅から枝分かれして、1986年まで営業していた旧富内線栄駅跡周辺である。富内線は1920年代から「金山線」として建設された。この鉄道は森林資源やクロム鉱・鉬山からの資源輸送のために建設されたが、この建設に多くの朝鮮人が動員され、旧栄駅近くの鉄橋(現在は撤去)付近に犠牲者が埋められたということである。現場付近は草が生い茂り、石先生の説明がないと全く分からないくらい、痕跡がみあたらない。たまたま1975年のこの付近の航空写真を見つけたので、それと比較しても、現在との変りようが激しいことがわかる。さらにこの近くの焼き肉店の方が石先生とお知り合いで、その方の話でも、炭鉱が近くにあったころは、文字通り栄えて、映画館があったというが、見渡すとこの焼き肉店を含め数件の家屋しかない状況に、当時の面影を探ることは難しい。

栄駅跡をでて、隣の平取町(びらとりちょう)の本町共同墓地に向かう。町を見下ろす斜面上に整然と建てられた石墓の奥の森の中(義経公園)にいろいろな形状・大きさの墓が並ぶ。「オキクルミ神」という墓石がある。オキクルミとはアイヌの神の名であるが、北行伝説のある義経と同一視して(させて)いる。ここはもともとアイヌ人の墓地であった。しかし墓地整地作業の名のもと、和人の墓を建てたということである。和人のふつうの墓石に「オキクルミ神の墓」(しかも目新しい)があるのも驚きだがなんと近くには義経の愛妾「静御前の墓」まである。啞然とするばかりだが、石先生は隣の「先祖代々萬霊無縁之塔」とある墓石と何もきざまれていない小さな石墓をさして、ここにも非業の死を遂げた朝鮮人犠牲者が「無縁」墓地という形で存在していることを教えてくれた。源義経、静御前の墓を作る余裕があれば、埋められた人びとの慰霊をしてあげれば良いと思うのだが、石先生のお話から、平取町の行政当局は、そのことに消極的のみならず、虐殺の記録を町史に掲載することにも反発したという。虐殺された人々の事実を覆い隠し

てしまおうと姿勢に、憤りを覚える。

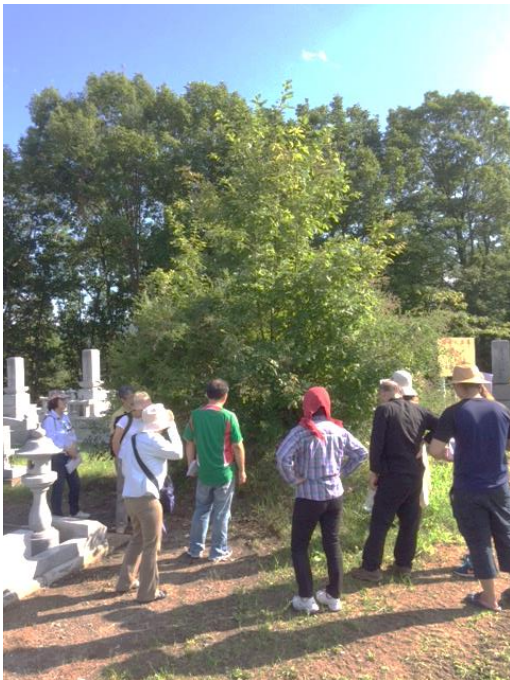
本町共同墓地を出て、町の中心地で昼食をとり、一休み。午後は少々迷いながら、牧場の中？にあるアイヌの方のお墓を訪ねた。私ははじめてアイヌのお墓を見て、何枚も写真をとった。その後国道237号線を北上し振内(ふれない)共同墓地に行く。ここも目新しい石墓が目立つが、この共同墓地の中央付近にこんもりと土が盛り上がり草生している場所がある。石先生によると、ここでも墓地整地中に朝鮮人と思われる遺骨が多数見つかった。(実際に朝鮮人の埋葬許可が下りている。)ブルドーザーで掘ったら出てきて、それをそのまま運んだのが、この盛り上がりであるという。つまりこの土盛りの下には無数の遺骨がそのままになっていることになる。その話を聞くだけでもぞっとするのに、この事実も行政サイドは秘密にしているという。平取町史を執筆した石先生がこの事実を記載しようとしたら、編集側からさまざまな妨害があ



って結局書けなかった。そして石先生は現在、大学当局を動かして発掘したいという気持ちが強いようであるが、本当にそうしてもらいたい。あわせてこの事実を周囲の立派な墓の遺族たちも知らないのではないかと思うと、怒りがまたこみあげてくる。昨年の交流会では、関東大震災の朝鮮人虐殺の真実が同じように覆い隠されようとすることを大竹さんらが一生懸命掘り起こそうと努力されていたのに感銘をうけたが、ここでは地域の住民たちが、アジア太平洋戦争中の悲劇を忘れさせて、あるいは忘れさせられるようにしているのか。

このあたりは平取町幌毛志といい 戦時中に富内線建設のために、多くの朝鮮人が厳しい労働を強いられた場所であり、それを請け負った川口組の多くの飯場跡の1つを訪ねてポロケシオマプ川に沿って道道に入った。道沿いに車を止めて石先生の説明を受けた。ここもまた緑一色に覆われ説明があっても、想像するのが難しいほど変わり果てている。この先に多くの朝鮮人が使役させられた旧富内線幌毛志隧道や線路跡があるが、昨年の災害で道道は通行止めになっている。私たちは大きく迂回して、むかわ町安住共同墓地に来た。先ほどの幌毛志の過酷な労働から逃亡した朝鮮人は、逃れたが捕まるなどして、虐殺され、焼かれた場所である。ここからも多くの無縁仏が発見された。ここも和人の立派な墓が並び、複雑な気持ちになる。

時刻は午後5時前で、今日の下見を終えて、今日の宿泊地の二風谷民宿に向かう。この時にアクシデントが起こった。斎藤さんに運転を代わってもらって助手席に座っていると、後ろの座席から、変なおいがする、音がするといわれた。止まってみるとなんと後部左のタイヤが激しくバースト(パンク)していた。この時にはじめて気が付いた。タイヤはほとんど溝がないほどすり減っている。これはパンクしたタイヤだけではない。昨日車を借りたときに、傷のチェックはしたが、まさかこんなタイヤだったとは想像していなかった。朝感じていた感覚は、道路のせいばかりではなかった。先行した石先生に戻ってもらい荷物を運んでもらいながら先に宿にいただいた。その間にJAFを呼んで、私たちは西の山に沈んでゆく太陽と、久しぶりのきれいな黄昏時の星空をみながら途方に暮れた。しかし通りかかった人のなかには、わざわざ車を止めてタイヤを交換してくれたり、荷物を運んでくれたりした方がいて、大感謝。北の大地の人々のお



おらかさにふれることもできた。アキシデントもまた楽しからずや。逃亡した朝鮮人をかくまった人々がいたことも、このような憐みの気持ちだったのだろうか。結局 JAF の人に再度タイヤを交換・点検してもらい、宿に向かうことができた。午後8時宿ではレンタカー屋さんが先に代用車を用意して待っていた。電話連絡した際に私も興奮気味に話したこともあったのだろうか、千歳から2時間近くかけてきたのだろうか。今思うとご苦労様でした。宿では先についた皆さんが食事をせず待っていてくれた。申し訳ありません。3度怒り、4度感謝した1日だった。

24日木曜日北海道交流会下見最終日、宿泊した二風谷の民宿「チセ」でも朝早く起きる。あたりは明るくなってきている。また恒例の散歩に出かけた。民宿（チセとはアイヌの伝統家屋のことだと後で知った）をでて目の前の国道237号線沿いを北に歩く。朝早いがこの道路は旭川と苫小牧方面を結ぶためか、

大型車両が結構走っている。この地の北方の札幌・胆振方面と道東地域を結ぶ日勝峠も昨年の災害以来、不通で近く復旧するとの報道を昨日の新聞でみた。災害の傷跡が色濃く残っていることを認識する。途中アイヌ民族の研究者で当地に生活したマンロー邸（現在は北海道大学の施設）の前を通り平取町アイヌ資料センターの前に来て、展示してあるチセを見て回った。それから民宿の前に戻り、眼前にある二風谷ダムサイトに足を向けた。アイヌ民族で国会議員になった萱野茂さんが反対運動をおこしたダムである。ダムというより堰といったほうが良い。沙流川の比較的流程が緩いところにこんな堰を作る必要があるのだろうか。と思う。ダム近隣がやたらと公園整備されているのを見るにつけ、何のためのダムだったのか。二風谷という、アイヌの人々にとって聖地の場所に？という疑問はとうとう消えなかった。

朝食の後、宿を出発して、最初にアイヌ人レラさんのお宅を訪ねた。来年の大会でお話をしていただく為だ。家には多くの自家製民具があり、販売もしていた。その後私達はすぐ近くの平取町アイヌ資料センターに立ち寄った。朝散歩したところである。アイヌの民芸品販売や復元したチセでの彫り物、刺繍の実演も見られるようである。二風谷ダム反対運動や国会議員時代にアイヌ文化復興法成立に尽力した萱野茂さんの記念資料館もこの近くにある。かつての「日本には先住民族はいない。」という政府見解を変更させたのも萱野さんの大業績である。一方で萱野さん亡き後、一昨日石先生が批判した内閣府の先住民のテーマパークのような白老「民族共生象徴空間」など、方向が違う政策が執り行われようとしていることも忘れてはいけないうだろう。本当の意味での共生にはまだ試行錯誤が必要なのだと思う。

ここから私達は日高を後にして千歳空港近くまで車を走らせた。今日は朝から雨が降ったり止んだりを繰り返しているが、千歳では本降りになってしまった。この千歳は新千歳空港があり、文字通り北海道の玄関口だが、自衛隊の大規模な施設もある。そして戦時中は海軍航空隊の基地であった。私達はまず現在防衛施設局の敷地になっている「旧慰安所」跡についた。雨に濡れながら、周囲の住宅地とは異質の森の中に続く堰堤のような盛り土の周辺にあった慰安所跡を見る。この慰安所には朝鮮人数名がいたという。さらに自衛隊東千歳駐屯地 第7師団ゲート前に来た。残念ながらこの中には入れなかったが、周囲のフェンス越しに戦時中に飛行場建設に動員された

人々が、死んで埋められたとされる所を見た。この飛行場建設に従事し、1995年にこの地を再訪問した安慶南氏によると、医務隊に従事し、病傷者を病院に運び、死者処分する役割を課せられ、実際に70～80人の朝鮮人が病院で死亡し、病院そばの空き地に穴を掘り、ガソリンで焼いて埋めたという。その場所とされるところが、今私達の目の前の場所である。雨は少し小降りになったが、私は陰惨な気持ちになって当地を離れた。これから後はイコロの森という所で石先生の出版記念パーティーがあるが、残念ながら私は列車の都合で、南千歳駅でみなと別れて今回の下見を終了した。

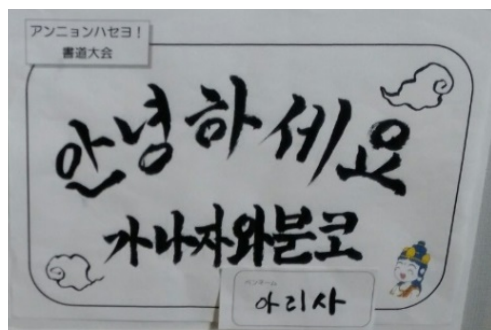
昨年FWを行った千葉でも、東京でも、今回の北海道でも、埋葬や追悼にまで民族の差を明確につける「日本人」とはどういう意識なのか、考えさせられる。同胞の遺骨なら、遠い異国の地にまで足を運び、立派な供養碑や墓石を建てるのに、自分達のすぐ隣で非業の死をとげた人々に対する取り扱いは、どう考えても動物並にしかすぎない。それではいけないと考える人も当たり前だがいて、きちんとした形で埋葬、供養し、追悼する、または遺骨を返還しようとする動きもあるが、あまりに少ない。追悼とは死者の生き様、死に様を想起して、死者との対話を試みて、今現在生きている私達を振り返ることだと思う。しかし虐殺された人にその追悼文すら惜しむ人が為政者であることに、怒りとやるせなさを感じたのは、北海道から帰ってすぐのことだった。



元曉展が開かれる

8月の暑い日、金沢文庫にて「アンニョンハセヨ!元曉法師—日本がみつめた新羅・高麗仏教—」を見ました。元曉(617-686)は新羅の僧。唐に渡りませんでした、多くの仏教の著作をのこし、民衆の間に浄土信仰をひろめました。日本の僧は元曉の著作からたくさん学んでいたこと、奈良時代の日本仏教は元曉と実に密接な関係にあったことをこの展示を通してあらためて知ることができました。そして元曉を日本と韓国・朝鮮の文化交流史、日本仏教史のなかに位置づける必要を感じました。

この展示とあわせて「アンニョンハセヨ 書道大会」も行っていました。一見元曉とは関係なさそうですが、子どもたちが韓国・朝鮮を実体験する上で良い試みだったと思います。(遠藤記)



継承日本語教育における漢字指導の実践例

ーハナ多文化センター「多隣」での実践を中心にー

尹(韓国外語大学博士課程)

1. 継承語教育の今日的な必要性

継承語とはマイノリティの言語である。移民の子など母語を失われた状態の、多くは子どもたち（移民二世以降に発生する問題である）が親の言語を理解できないためにおこる問題を解決するための言語である。アジア諸国の言語政策をみると、中国、ベトナムは多民族社会であると宣言し、少数民族保護政策をとっているため、少数民族の言語も保証され、小学校から大学まで、少数民族のための学校（学長も少数民族出身）も、建てられている。韓国は単一民族国家の立場をとるが、移民政策において、母語教育を推奨しており、全国各地の多文化センターを建て、多文化指導講師の養成と多文化支援教室を運営し、子どもたちが一方の親の母語を学ぶことができる。日本は、移民政策がなく、また単一民族国家の立場から、言語政策としての少数民族の言語教育も行われていない。外国にルーツのある子どもたちが学ぶ機会は、国に認可された各種の外国人学校にとどまっている。日本の国公立の国民教育機関では、国際理解教育が打ち出されているが、個々の母語を学ぶ機会（英語以外の）はなく、ダブルスクール制度も認められていない。日本での継承語教育の必要性は、外国からの移民や呼び寄せの子どもたちのアイデンティティ・クライシス（自死や傷害事件などが起こっている）を食い止めつつ、豊かなアイデンティティを育むためであり、親子のコミュニケーション、母語によるコミュニケーションの復活であり、将来の親の母国への往来や、親族友人との接触経験を広げるためである。このように複数の国を母国とする子どもたちを、多言語の人材として育てることは、その個人の可能性を広げるだけでなく、日本との友好の懸け橋となる人材を育てることに他ならないと言える。

韓国における継承語教育の必要性は、継承語教育（韓国では「母国語教育」「二重語教育」と呼ばれる）がない日本での実態によって生み出された問題状況を教訓化していくことであるだろうと考えられる。大量移民の受け入れが日本より遅く始まり、韓国ではまだ移民二世の言語・アイデンティティの問題は新しい問題と言える。しかし、喫緊の課題であることはいまでもなく、子どもの教育を受ける権利の重要な一面であると考えられる。本稿では継承日本語の指導現場での実践例を取り上げ、継承語教育の意義を考える一助とする。

2. 日本語教育における、漢字指導の意義

2.1 なぜ漢字をとりあげるのか

①漢字は現在世界中で使用されている文字 28 文字の中で、唯一の表意文字である。この特異性は、注目すべき面白さを生んでいる。漢字を知り操作するうちに、頭脳回転に良い影響が出るといふ説もある。何より、漢字を使った遊び教材をたくさん生み出すことができるために、学習者の意欲をそそり、楽しく文字学習することができるのである。

②現代日本語で使われている文字は、ひらがな、カタカナ、漢字の3つである。ひらがな、カタカナも漢字を崩し再構成して作った文字である。また、日本語の語彙の大半は漢字が占めている。特に西洋の先進学問を盛んに取り入れた時期、外国語で書かれた学術語を日本語に訳すために漢字を当てていった（「哲学」など）。そうして新しく日本で作られた語彙を含めると、日本語を理

解するためには漢字を理解する必要があるといえる。また実際の生活場面での使用頻度も高い。駅名や、公共施設の案内表示は多国語表示が進んでいるが、一般商業施設の看板や、人名、書物、新聞まで、漢字が多く使われている。そのため、漢字を知らないと困難な場面が多い。それが漢字指導の実用的な意味であるだろう。

③ 大きな観点から見ると、アジア人としてのアイデンティティ、漢字文化圏に生きる連帯感を感じる良い教材となるだろう。漢字文化圏はルーツを共にし、漢字形成の世界観を共有している。そのため、漢字を学ぶと、言葉が似ている、生活様式や価値観が似ていることを再確認することができる。韓国語では、60%から 70%、ベトナム語では 60%が漢字語であると言われている。

(ベトナムの多数派であるキン族は中国における漢族である)。もちろん中国語は 100%である。共に米を食べ、箸を使う文化であることが、多くの言葉・文字の共通性に表れているとみることができる。例えば豆腐は同じ漢字であり、従って発音もよく似ている(トウフ、トゥブ、トゥーフーなど)。多くの姓名が漢字がもとになっていることや、十二支がある(ベトナムでは猪年は猫年になり、韓国では、猪の代わりに豚が登場する)。このように、文化を共有していることから東アジアの友好と平和について考える、一つのきっかけとなるだろうと考える。

3. 日本語教育としての漢字指導の実例

3.1. 日本における外国ルーツの子どもへの日本語教育と漢字指導の実例

- ・東京大田区での「虹の架け橋」教室における漢字指導(子細省略)

3.2. 韓国における韓国人児童への日本語教育と漢字指導の実例

・江北区にある革新学校ユヒョン小学校(유현륜峴忠동학교)6年2組ウジョン(우지영)学級での漢字指導(授業者は善元幸夫氏、補助指導として尹チョジャが行った。4月15日の「多隣」での授業と同様な内容を韓国語で行った。)

4. 日本語教育の一部としての継承日本語教育における漢字指導の実例

4.1. ハナ多文化センター「多隣」における日本語教育

・「多隣」日本語グループにおいて、韓日カップルの子どもたちに直接に日本語・日本文化を教えたい、という動機は一致していたが、何をゴールとして、どのように教えていくのか、についての各メンバーの考えは各人各様であった。指導者メンバー約8人の個人的経験や生活背景も異なり、思いはさまざまであったが、まずは行動ありきで、実践を始める中で討論し考えを調整していった。

・一般の日本語教育との違いである、継承日本語教育の独自性についての内容的な合意はいまだ途上にあり、まだまだ話し合いが必要である。しかし、一部にアイデンティティ教育があげられるだろうということは全体で確認できた。その具体的な目標となる子ども像を描けているわけでもなく、どういった時期にどのような教材を通じて行うかについても、十分な合意が図られていなかった。

・メンバーのほとんどが、韓国での日本語教師の経験を持っていたので、漢字指導も、四文字熟語の指導などで韓国の学生に対して指導を行った者もいた。「多隣」で日本語の漢字を指導する実践を一つのきっかけとして、韓日ダブルであることへの自尊感情を育て、自由で豊かなア

イデンティティを育てるためにも、多方面から考えていく機会となるだろうと考える。

4.2.漢字指導の導入

①半自覚的導入期（2015年9月～12月「秋学期」、2016年3月～7月「春学期」）

・2015年、多文化センター「多隣」が多文化家庭の子ども向けに5つの母語保障教室を開設した。その一つの日本語グループの指導講師を「韓国継承日本語教育研究会」の運営委員が全面的に引き受けることになった。研究会としては、韓日カップルのダブルの子どもたちに直に日本語・日本文化を教えるという、現場実践を担いながら、同時に継承日本語とは何か、という研究を進めていく道をとったことになる。「多隣」の日本語グループが発足した頃の頃、指導計画の作成、教材の選択、活動の組み立てなど、すべてが手探りであり、現場の子どもたちの指導に迫られる一方、「多隣」の運営方針との調整など、山積みの問題を抱えていた。教室創設当初の、混乱期にあって、漢字をどのように教えるかは十分に討論されてこなかった。しかし、半自覚的ながら、漢字を導入してきたのは、漢字が日本語の重要な一部であるからである。例えば、家庭に向けて毎週のお便りを作成・発行し、前回授業で学習した内容をお知らせしたが、親子で読めるように、日本の小学校低学年で習う漢字は積極的に使い、振り仮名をふって発行した。また、名前の大切さを考える授業を行い、自分の二つの名まえの由来や、名前に込めた親の願いを親に書き込んでもらい、冊子を作製した。命名時に日本語読みと韓国語読みが同じである（両読みできる）漢字をあえてつけた家庭がほとんどであり、漢字が一つ一つ意味があり、また共通する音で読めるということを感じる機会を設けることができた。

②自覚的導入期（2016年9月～12月「秋学期」、2017年4月～「春学期」）

・漢字を教える授業を行い、市販の「基本漢字101カルタ」を小グループごとにカルタ取り遊びをする、など積極的に導入していった。宿題として漢字学習プリントを与えたり、「十の画べえ」を教える授業を行ったり、独立教材として漢字指導を導入した。また日本語習字を導入した折、卒業制作として子どもたち各自が自分の好きな漢字を選んで書くことを課題にした。習字指導の最終回は、子どもが選んだ漢字の字源を金石文字からどのように今の漢字に変化したのか図示し、漢字のなりたちの意味を考える授業を行った。これらの資料を集めて、漢字クイズを含めて冊子として作り、各自が休み中に自習できるように、配布した。

・4月15日には、ゲスト講師として、漢字指導研究者でもあり、東京で日本語学級の教師をしていた善元幸夫氏を招き、特別講座を行った。その授業内容は、以下のような構成であった。

- (1)金石文字から現代の漢字を当てる「漢字クイズ」や「何だ何だ、これはなんだ!」は、漢字が表意文字であり、それぞれの字源をたどると、大昔の人間の暮らしぶりや知恵が伝わることを認識できた。つまり「意味」を持っている文字であることが漢字の独自性であることも認識できた。
- (2)「十の画べえ」を役立てて、自分たちで漢字を写し書きし、作った漢字カードを半分に切って「漢字ババ抜き」を小グループで行った。楽しく遊びながら漢字の「形」を認識していった。
- (3)また「漢字お経」では、リズムカルに唱えながら、漢字の「音」（音読み）を認識していった。

5. 考察と結論

5.1. 漢字指導の改革

これまで漢字指導は硬直した、義務的な書き写しや丸暗記に終始する場合が多かったと推察できる。日本の小・中学校でも同様である。しかし、継承語教育において、子どもが対象になる時、指導者はどのようにしたら漢字の面白さや有用さを子どもに伝えられるかが問われて来る。その

工夫なくしては、子どもにとって、漢字学習は苦行となる。継承語という、学習者にとっての切実感のない学習においては、面白さの発見や楽しい学習プログラムがなければ学習が成立していない。韓国というホスト国で暮らす以上、その社会言語である韓国語ができていれば、継承日本語はとりあえず知らなくても不自由なく生活できるのである。継承語教育の現場では切迫感のなさが第一の関門である。漢字指導の実践に活かせる工夫がこれまでの実践例によって示されたと考える。漢字授業のコンセプトは漢字で遊び、楽しみながら、漢字の面白さに気付いていくことであるだろう、と確認できる。漢字指導だけでなく、継承語教育のすべての指導内容に共通するコンセプトであるだろうと言える。これは授業改革に結びつくものである。同時に授業の指導者が、子どもたちの学習意欲を喚起するために、様々な工夫を見せ方、ほめ方、引き出し方など、細かな授業技術・態度を磨くことも必要であると再確認できる。

5.2 再確認できた、子どもたちの漢字への意欲・関心

それぞれの実践例では、「子どもたちは漢字を学びたがっている」そのように感じられる反応ぶり、熱心に取り組む姿によって漢字が有効であることを裏付けたと考える。

①特に「多隣」で行われた4月15日の善元授業では、指導対象者は小学1年生から6年生まで23名で、多学年にわたっていたが、誰もが脱落することなく、楽しそうに笑顔で作業に取り組み、積極的にゲーム遊びに参加した。特に2年生になったばかりのA（男子）は漢字ババ抜きで大きい学年の知らない子どもたちとも楽しそうに遊び、一言であったが、漢字を声を出して読むことができた。この児童は、日本語に自信がなく、いつも兄の陰にいて、自分から発語することはほとんどなかったが、この授業では思わず知っている漢字を見つけ、声に出した。前に行った指導で覚えていたものであった。このように漢字指導が積みあがっていくものであること、また、子どもたちが楽しく覚え、定着していくことがわかる一例であった。

②また江北区のユヒョン小学校の6年2組での授業でも、同様に漢字クイズに面白そうに取り組む姿が多く見られ、韓国人の子どもたちにとっても興味を持てる教材であることがわかった。24名のクラスで漢字を知っているという児童は2人であったが、多くの子が漢字を知りたいと答えていた。日本語への興味と重なっており、「何だ何だ、こりゃなんだ？」というクイズでは、掛け声を全員で行い、最後の「ホイ」という合図は特に気に入って、ひととき大きな声で唱和していた。日本語を覚えたいという動機から、日本語の一部としての漢字に対する興味が旺盛であることが、その反応から強く感じられた。

5.3. 既知の韓国語や、韓国漢字との関連

今後の課題として考えられることは、漢字指導において間口を広げることであるだろう。つまり、既知の韓国語や既知の韓国漢字からも入れる道を作ることは、漢字学習の面白さを倍加することになるはずである。例えば、韓国語で読んでも日本語で読んでも同じ音の漢字を探す。またアメリカのことを韓国では美国と漢字を当てたが、日本は米国としたのはなぜだろうか、などの違いから漢字の意味に気付く方法もある。比較文化学の方法で、漢字の読み（発音）を比較して、共通点や違いを教材化していくのもよいと考える。漢字は今後何通りもゲームや遊びに発展させ、教材化できる可能性を持っていると考える。そのように、韓国と日本の漢字の間にある、多くの共通点や違いを知ること、二つの文化を相対化してみることができると可能性も大きいと考える。これが絶対の価値であると考え硬直した枠組みから自由になり、韓日二つの文化を享受することによって、韓日の垣根はどんどん低くなり、両方の文化を自由に学べる韓日ダブルの存在も豊かにものが見られる、見晴らしの良い楽しい位置に在るのだと、自己を肯定的にとらえられるのではないかと考えられる。

《参考文献》

ジム・カミンズ (2011) 中島和子訳 『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会株式会社
善元幸夫 (2007) 『にほんごチャレンジ3級【ことばと漢字】別冊 漢字はおもしろい』株式会社アスク
金子都美絵・白川静 (2010) 『絵で読む 漢字のなりたち』株式会社太郎次郎社エディタス

〈付記〉

- ・解放後、1980年代まで漢字を学校で教えたり、新聞や公的文書が漢字ハングル混じり文で書かれたりしていたが、その後全面的にハングル表記となった。
- ・理由としては、日本統治時代の日本語教育の影響で日本語がなお、多く残存している状況では、固有語を復活させるべきだという議論が優勢となり、漢字を正課・公用文書から廃した。
- ・その後英語教育がさかんになり、小学校では漢字は課外（選択）でのみ教えている。民間の漢字検定試験を受ける人も多く、漢字ブームも起きている。

第23回洪城交流会アンケート集計(抄)

1. 今度の交流会の日程で一番印象深かった行事は何ですか？

- フィールドワーク 若い共同農場を訪れて話を聞いたこと。様々な実験的試みをしていて興味深かったです。
- プルム学校の見学 自然との共生を目指した、また地域をあげての教育は興味深かった。
- 隣国・韓国の地方の歴史と現在の姿を知ることになった全体。ソウルからホンソンへの道、バスの窓からの風景、寄宿舎での生活、プルム学校、農場経営などを、その地で悩みと希望を語ってくれたフィールドワークと講演、授業報告、全てが地道な活動を教えてくれた。
- プルム学校の教育内容、教育実践がすばらしかった。
プルム学校の教育が地域に広がり、それらがそれぞれ進化してゆき、やがて独立し、学校を支える存在になる、そういう循環がすばらしい。何より地域をプルム学校の教育が作りあげていることに感動しました。
- フィールドワークで訪れたプルム学校、農場、売店、結城郷校などです。
特に農場では、高校生たちが農業体験をしていることなどを知り、洪城の地でのプルム学校の可能性を感じました。
結城郷校では、結城郷校の歴史などを教えていただいたほか、衣装を着てお茶を美味しくいただき、その時代を体験することができました。しかし、より印象的だったのは、初日のバスの中で、結城郷校の先生がバスを運転されながら道の両側に広がっている田んぼが干拓されたものであること、そして干拓が環境に悪影響を及ぼしているとお話でした。
- プルム学校訪問と若い共同農場のチョンミンジョル（鄭旻哲）さんの話。
資料を読んだ段階ではプルム学校について、大したことはないのではないかと半信半疑でした。行ってみて、木の香る清潔な校舎から普段の学校生活が偲ばれました。（生徒たちに会えなかったのが残念ですが。）校長先生のお話から入学希望者が多く、それでも少人数の学校として設立精神を大切にしていると伺い、これこそあるべき教育の姿ではないかと思いました。

チョンさんのお話でホンソンマウルでは若い世代の人口が多いことを知り、プルム学校出身者とその賛同者が中心になって住みやすく、健全な農村を築いていることが分かりました。多くの努力が感じられました。

- 私はフィールドワークの旅が一番印象深かったです。学生たちが本を読んで感じた感想を紙に留めて図書館のあちこちに貼られているのが印象的でした。そして目を少しだけ返しても‘緑’が見える学校を見ながらうらやましいなと思いました。

2 今度の交流会で一番楽しかったことは何ですか？

- 韓国のみなさんにお会い出来た事。立川さんの参加が嬉しかった。
- 伝統婚礼を終えてレセプションをしたのが一番楽しかったです。静かな田舎で豊かさを感じました。ちょうど満月で、丸くなった月を見あげながら、‘幸せ’を感じました。以降にあったレセプションもとても楽しかったです。
- 結城郷校でのレセプションでした。交流会参加者が花嫁、花婿になる結婚式を見、美味しい料理を味わうことができました。
- もちろんレセプション。毎度のことながら韓国側の多彩なエンターテインメントにびっくり。模擬結婚式、はじめて見て、興味深かった。郷校での茶礼も初体験できてうれしかった。
- レセプション。野外の伝統的な家屋に囲まれた月夜に照らされての舞台、楽しもう楽しませようという双方の心意気が良かった。重ねられた出会い、新しい人々との出会い、しみじみと未来への可能性・希望を感じる事が出来た。
- レセプションも涼しくなり、満月もかかって環境がすばらしかったです。歌って踊ってこんなに笑ったことがないほど笑いました。色々な才能ある若い人達が参加して将来有望です。
- レセプションと会場の屋根の上の満月のすばらしかったこと。
- 伝統的な結婚式から始まったレセプション。外で食べる食事はおいしい。「洪城スタイル」での高校生と実行委員長のパフォーマンスにはびっくり。

3 今度の交流会に対するご感想をお書き下さい。

- 韓国の教師の方々の若年参加が、うらやましかった。(いつものことながら)
- 洪城地域で開催される交流会で、宿所やフィールドワークの場所など準備過程で色々な苦労があったことと思います。運営陣も、とても頑張ってお蔭でスムーズに大会が運営されてよかったと思います。
- 最初は日本側の参加者が少なく、どうなるか心配しましたが、相変わらず、活発な先生方々日本側にもまた、感動しました。尚且つ、韓国側の新しいメンバーや新運営陣の準備に頭が下がりました。
- 初めての参加でしたので、戸惑うこともありましたが、全てが新鮮で、勉強になりました。教育交流会でしたので、教育者でない自分が参加して大丈夫なのかと参加前は不安もありましたが、皆様温かく迎えてくれて心配も吹き飛びました。
また、教員側からだけでなく、学生側からの発表があったことは、双方にとってとても良いことだと感じました。どちらにも属さない私にとっては、難しい討議だけでなく、伝統茶の体験や伝統結婚式の観覧があったことは韓国の文化を理解するためにも有益でした。
- 運営する韓国側の意志・心行動が全て生き生きとしていた。「プルム学校」を中心としたホンソンという地域から、持続可能な未来への探求という難しいテーマであったが、謙虚で率直な取り組みや人のつながりのなかで確実な存在感をもつアプローチであった。
- 洪城という場所、会場の青雲大学も快適、宿舍も清潔で使いやすく、十分に休めました。スケ

ジュールはいつものことながら盛りだくさんでしたが、1年に1度しかない交流会なので、こうでなければもったいない。

- 今回、韓国環境運動の拠点となっている地域で交流会を開いたことで、地域社会と密接に連携した運動が見事に成功しているのを見させていただきました。試行錯誤しての成果でしょうが、大変勉強になりました。
- お若い会長ナンバー1、ナンバー2、ナンバー3がとても誠実に尽くして下さり、交流会も円滑、かつ充実した進行になりました。宿舎も清潔で申し分なく食事もおいしくしかも無農薬。もちろん実行委員長のチョングァンシク先生のご尽力も大きかったことでしょう。ありがとうございました。また元気をいただき、拙い自分ながらできることを探しつつ努力したいと思いました。
- 今回の討論会で交わした話は実現可能性が希薄ではないだろうかという心配がありました。しかし、学生たちのために絶えずより良い教育について悩んでいらっしゃる先生方に会って、私たちが交わした話が現実でも行うことができるものではないかという希望を見ました。学生たちのためにいつも悩んで考えて下さってありがとうございます。
- 韓国の新しい会員たちの意欲的な姿勢、活躍は目を見張るほどだった。ハンソンイさんなど、若い会員が研究会を担っていることに、頼もしさを感じた。
- 「ろうそく革命」を成し遂げた韓国の民主化闘争の底に、このような生き生きした農業革命を進める人々がいることがわかり、感銘を受けた。フィールドワークで出会った人々が、それぞれに自分の仕事に誇りと喜びを持っているようにみえた。教育の分野でも、革新学校における自由な学びの雰囲気は、日本で失われていると感じさせられた。自由な学び場をどのように守り、育てていくのかが日本の学校にとって大きな課題であることを改めて感じさせられた。

4 次期の交流会に望む点は何ですか？

- 今回の交流会では韓国側の方々のお骨折りで環境運動などを地道にされている現場を見ることができました。来年は北海道で、日本側会員がほとんど親しんでいない土地（私自身も過去に1度旅行で訪れたことがあるだけ）ですが、下見、事前学習などを行っていきたいと思っています。
- 歴史をふまえて、希望の見えてくる交流会でありたい。近現代の歴史の影の部分、犠牲にされた人々や事実を知ると同時に、明らかにしてきた経過・努力を知りたい。北海道という地域の今も知りたい。
- 日本側にも、新しいメンバーが増えることです!!
- 今回、大森先生の報告が聞けなくて残念でした。次回には聞きたいです。

ウリ 110 号 2017 年 9 月 10 日

日韓合同授業研究会

代表 藤田

事務局連絡先

E-mail larribee1991@yahoo.co.jp

年会費 3,000 円

入会をご希望の方は、上記のメール

アドレスにお問い合わせください。